



山口 周

独立研究者・作家・パブリックスピーカー

ポストコロナ社会における 普遍的な価値とは

※取材は2020年4月20日に実施



矢野 和男

株式会社日立製作所 フェロー
株式会社ハピネスプラネット代表取締役 CEO

新型コロナウイルス(COVID-19)が世界中で猛威を振るい、感染拡大防止に向けた外出制限の下で日常生活もビジネスの風景も大きく様変わりしている。ソーシャルディスタンスにより人とのつながりが薄れ、在宅勤務や自宅待機によるストレスの増加も懸念される今、人間にとっての「幸福」とは何かをあらためて問われている。今回は、幸福の計測において多くの研究成果をあげてきた矢野和男フェローをゲストに迎える。緊急事態宣言が発令される中、オンラインで行われた対談では、新型コロナウイルスによって一変した社会においても変わらない価値、そして予測不能な未来と向き合うための考え方について、深い考察が加えられた。

その1 幸福とは何かをあらためて考える

幸福な組織に見られる四つの特徴

山口 新型コロナウイルスの感染拡大が世界中で大きな問題となり、生活が一変してしまっただ方も多いと思います。矢野さんはブログでこのウイルスを、「幸せを求める人の心につけ込むウイルス」と評しておられました。幸福の計測を大きな研究テーマとしてこられた矢野さんならではの視点ですね。

矢野 われわれは15年ほど前から、人間の幸福というものを客観的に捉える研究に取り組んできました。職場のような組織において人が幸福を感じる条件は、業務内容や個人の性格によって大きく異なります。でも、大量のデータを集めれば何か共通する要素、法則を見つけ出せるのではないかと考え、ウェアラブルセンサーなどで取得できる人間の行動やコミュニケーションのデータ、業務データなどの客観的なデータを集め、質問紙による主観的な幸福感の増減と合わせて解析してみました。その結果、組織における人と人とのつながり、コミュニケーションのあり方と幸せとの相関関係を見出したのです。

一人ひとりの幸福度が高く、生産性が高い組織には、普遍的かつ定量的に計測できる特徴があります。まず、人と人とのつながりを線で表

すソーシャルグラフの中に三角形が多い、つまり、自分とつながりのある人同士もまたつながりがあるという関係が多いほど、組織における人間関係が密で、幸福度が高い傾向にあります。二つ目の特徴は、5〜15分程度の短い会話の頻度が高いことです。これは、組織のメンバーが気軽に会話できる関係にあるかどうかを示しています。しかもその会話が双方向であり、会議でも全員が均等に発言しているなど、つながりが平等であることが三つ目の特徴です。

さらに、会話する相手と体の動きが同調していることも重要です。人間のコミュニケーションは言葉によるものだけでなく、声の調子や体の動きなどの非言語の情報で、相手に対する共感や拒絶を伝達しています。幸福度の高い組織では、特に体の動きがコミュニケーションの相手と同調している傾向が強く見られます。人は一人では生きていけないと言われるとおり、人類は集団で協力し合うことで繁栄してきた生物です。人と協力することによって幸福感が高まるという生化学的な仕組みを進化の過程で獲得してきました。

リモートワークでも幸福は感じられる

山口 本能的に人とのつながりに幸せを感じるからこそ、密集・密接・密閉、いわゆる「三密」

のような行動を人間は取ってしまいがちで、それがウイルスの感染拡大につながるのには皮肉ですね。
矢野 おっしゃるとおりです。幸せを求める人間の本能的な行動につけ込むウイルスは邪悪だと言わざるを得ません。
山口 そのために、今回の対談もそうですが、社会的な機能が仮想空間にシフトしています。このことは仕事や教育の変革が進むきっかけになると期待される一方で、仮想空間はおっしゃるような幸福の四要素が不足するのではないかと、いう心配もあります。

矢野 私も1か月以上在宅勤務が続いています。が、たしかにリモートワークは幸福感を得にくく、注意しないとストレスが増え、抑うつ傾向が高まる可能性があります。ただ、5分程度の短い双方向の会話、確認や報告、雑談を遠慮せずに行う環境をつくることは、リーダーが推奨し、一人ひとりが意識することでリモートワークでも可能になると思います。電話での会話でうなずいたりするように、離れていても相手を想像して身体的な同調を意識することも幸福度を高めます。

また、現在のリモートワークでは、新たな出会いが不足することも問題です。目的を持たずに集まった場で新たな出会いや縁が生じることで、よくありますよね。仮想空間でもそう

した場づくりのサポートや、人とのつながりを感じられるような技術の開発、あるいは運用の工夫がこれから必要になるでしょうね。

山口 デジタル技術の急速な発展を考えると、仮想空間でのコミュニケーションもどんどん洗練されていくのではないのでしょうか。

矢野 そうですね。危機はチャンスでもありません。このコロナ禍を、「幸福」とは何かをあらためて考え、ソーシャルディスタンスを超えて幸福を感じられるように、われわれが変わる契機と捉えることが大切なのではないでしょうか。

◆その2 複雑な現象を統一的に理解したい

矢野 フェローが見出した幸福な組織の特徴は、イノベーションが起きやすい組織の要件に近いと山口氏は指摘、仮想空間シフトが進む中で期待される新しい働き方について語る。後半では矢野フェローが幸福の研究に着手したきっかけを明らかにする。

仮想空間シフトで働き方が変わる

山口 前回は幸福な組織の特徴について伺いましたが、人間関係がフラットで、双方向のコミュニケーションが活発であることは、イノベーションが起きやすい組織の要件に近いと感じます。

データを活用して複雑な現象を理解する

山口 矢野さんの研究についてお伺いしたいのですが、幸福という個人によって異なる概念に対して統一的なパラメータを見つけないとお考えになったのはなぜでしょうか。

矢野 統一法則の発見をめざしたいという思いには、私が専攻してきた理論物理学の考え方が影響していると思います。物理学というのは、物の理を精緻に、統一的に理解することをめざす学問です。物と聞くと無生物をイメージしがちですが、人間を含む生物も物質的な枠組みの上になり立っています。そう考えると、人間や人間がかかわる社会や経済のような複雑な現象も、物理学的な統一理論の枠組みで理解できるのではないかと。そんな仮説を大学院生の頃から持っていました。

就職してからは当時日本の勢いのあった半導体デバイスの研究に従事していたのですが、十数年前に会社が半導体事業から撤退したため、これから何に取り組んでいくべきかを仲間と議論する中で、かつての夢がよみがえってきたわけです。

山口 理論物理学の手法で人間を理解しようとする。

矢野 生物や社会のような複雑な現象を扱う科学というと、1990年代に流行った複雑系科学がよく知られています。ただ、当時の研究は数理モデリングとシミュレーションが中心で、実データを用いた検証があまりできなかったことが課題でした。理論があっても実際の観測



した。それらに加え、おっしゃったような偶然的出会いも重要だと言われています。仮想空間へのシフトが進む中でイノベーションを促進するためにも、実空間に近いコミュニケーションをできるだけ早く可能にすることが必要かもしれません。

矢野 リモートワークによって、対面でのコミュニケーションや、縁をつなぐ場づくりの大切さが再認識されていますよね。仮想空間でのコミュニケーションをリアルに近づけようとチャレンジする人も増え、技術革新が進むので

データによる反証ができなければ科学とは言えませんから。

山口 カール・ポパー(*)の提唱した反証可能性ですね。

矢野 その通りです。私がこの研究を始めようとした頃も、人間の行動や社会活動にかかわるデータを集める環境はまだ整っていませんでした。でも近い将来にはそうしたデータを大量に取得できる時代が到来し、データによる反証が可能になると見ていました。その構想をMIT (マサチューセッツ工科大学) やハーバード大学の研究者達に話してみたところ、実は当時、大量の実社会データを活用して、社会という人間がつくった抽象的な概念で構成されるものの挙動を定量的に理解しようという「社会物理学」の試みが始まっていたのです。そのため私の構想に共感してくれる人も多く、共同研究などの具体的な動きを早い段階からスタートできました。

(その3)物理学の視点で社会の動きを見る(2)に続く...
続きは左記Executive Foresight Onlineをご覧ください。

■本稿「ポストコロナ社会における普遍的な価値とは」の続編をWebマガジン「Executive Foresight Online」に掲載しています。

- 【その3】物理学の視点で社会の動きを見る
- 【その4】データとAIで未来を見通すことはできない
- 【その5】幸福という普遍的な価値を軸に



https://www.foresight.ext.hitachi.co.jp/_tags/post-corona-society-universal-values

はないのでしょうか。

山口 今後、仮想空間が洗練されていき、リモートワークが当たり前の世界になると、人材獲得における地理的な制約も少なくなると考えられます。言語の問題はあるかもしれませんが、オンラインシスコやバルセロナに住む人と一緒にチームを組んで働くことも可能になるわけです。移動が難しい障がい者の方々などが活躍できる機会を増やすことにもつながるはずですよ。おっしゃっていたように、幸福の感じ方が業務やパーソナリティによって異なるとすると、会社が最大公約数的に環境を整えた場所に集まって仕事をするよりも、個人個人がパフォーマンスを最大化できる環境で仕事をしたほうが、生産性が高まりますよね。東京一極集中を脱し、好きなところに住んで、好きな環境で仕事ができるようになること、おもしろい社会になるのではと思います。

矢野 山口さんはもう、そういう働き方をされているのではないですか。

山口 そうですね。私は自分の人生を実験の場にしていくようなもので、いろいろトライしてダメなら補正するというのを繰り返しているのですが。

矢野 私も同じです。われわれの研究チームでは、おっしゃるような仕事のスタイルに近いことを始めていますね。さまざまなグローバルな研究者の方々と一緒に研究を行っています。ミーティングなどはほとんどオンラインで、一度も実際に会ったことのない方と意気投合して仕事をしていたりします。



【山口周(やまぐち・しゅう)】

独立研究者・著作家・パブリックスピーカー。1970年東京都生まれ。電通、BCGなどで戦略策定、文化政策立案、組織開発等に従事した後、独立。著書に『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?』、『武器になる哲学』など。最新著は『ニュータイプの時代 新時代を生き抜く24の思考・行動様式』(ダイヤモンド社)。慶應義塾大学文学部哲学科、同大学院美学美術史学専攻修了。

【矢野和男(やの・かずお)】

1959年山形県生まれ。1984年早稲田大学大学院理工学研究科物理学専攻修士課程を修了し日立製作所に入社。同社の中央研究所にて半導体研究に携わり、1993年単一電子メモリの室温動作に世界で初めて成功する。同年、博士号(工学)を取得。2004年から、世界に先駆けてウェアラブル技術とビッグデータ収集・活用の研究に着手。2014年、自著『データの見えざる手 ウェアラブルセンサが明かす人間・組織・社会の法則』が、Book Vinegar社の2014年ビジネス書ベスト10に選ばれる。論文被引用件数は2,500件にのぼり、特許出願は350件超。東京工業大学情報理工学院特定教授。文部科学省情報科学技術委員。

(*) カール・ポパー (1902-1994) オーストリア出身イギリスの哲学者。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス教授を歴任。科学哲学や社会哲学、政治哲学について提唱を行った。特に科学的言説には反証可能性 (仮説が間違っていることが証明される可能性) が必要条件であると提唱したことやオープンソサエティ (開かれた社会) についての思想も広く知られている。

次のページ「Executive Foresight Online (EFO)」の山口周氏連載シリーズの書籍と矢野和男の最新書籍を紹介しています。